

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- カリキュラム改革と教育の質保証
教務部長 文学部教授
小野 浩一
- 2011 年度「学生による授業アンケート」(前期) 集計結果
- 座談会「学生から見た授業アンケート」
経営学部教授 猿山義広
- FD推進委員会の今後の活動予定
- 書評

カリキュラム改革と教育の質保証

教務部長
文学部教授 小野 浩一

平成 26 年度実施に向けたカリキュラム改革の作業が本格的にスタートした。本学では、平成 8 年に大規模なカリキュラムの改編を行って以来、各学部学科による個別的な変更はあったものの、全学共通科目を含むカリキュラムの本格的な見直しは行われなかった。その意味で今回のカリキュラム改革は今後の駒澤大学の教育全体を方向づける大事業である。

なぜカリキュラム改革を行うのか、それは言うまでもなく本学の教育の質を高めるためである。近年、中央教育審議会の答申はじめ世の中で広く「教育の質保証」ということが叫ばれているが、ただし、教育の質というのは極めて多義的な概念である。校地施設、設備、図書館の所蔵冊数、教職員数など財政に直結するような量的な側面も質を構成する重要な要素であろうし、また、教育目標、カリキュラム、教育内容、教育方法、教員の能力、事務組織のあり方なども、まさに教育の質を左右する重要な要素である。教育の質を決定づけるこれらの諸要素の中で、カリキュラムはその中核をなす構成要素である。

駒澤大学の教育の質がどのようなレベルにあるかといった検証は、これまで十分になされてきただろうか。量的な側面の早期の改善が不透明な今、もし不十分な部分があるとすれば、どのようにして教育の質を向上させることができるのか。今回のカリキュラム改革が、各学部学科をはじめ本学全体の教育の質を徹底的に見直し、その改善を図るための絶好の機会となることを期待したい。

カリキュラムは教育の質の中核をなすものではあるが、カリキュラムに実質を与える教育内容・教育方法の改善が伴わなければ、教育の質の改善は達成できない。カリキュラムと授業改善はまさに車の両輪である。科目設置の目標はシラバスに反映されているか、シラバスどおりに授業は展開されているか、学生は授業に関心を持ち積極的に取り組んでいるか、成績評価は厳正になされているか、学部としてあるいは学科としての教育目標は達成されているか、など実証的な根拠に基づいてカリキュラムの実行状態を把握し、次なる改善策へと進めていかなければならない。これらの検証行為を行い、さらなる教育の質の向上を図るためには、教員が個人として力量を発揮する部分も大事であるが、それ以上に学部学科をはじめ大学全体が組織として取り組まなければ達成できないような難しい局面に至っていると感じている。

2011年度「学生による授業アンケート」(前期)

の集計結果について

2011年度「学生による授業アンケート」(前期)を以下のとおり実施した。なお、本年度は、東日本大震災による学事日程の変更に伴い、当初予定していた実施期間を変更した。

実施日	平成23年7月4日(月)～7月9日(土)
対象科目	406科目
対象者数	37,047人
実施科目数	406科目(100%)
有効回答数	20,473枚(55.3%)

【質問項目】

- Q 1. 時間どおりに出席した割合はどのくらいですか。
5: 100～80% 4: 79～60% 3: 59～40% 2: 39～20%
1: 20%未満
- Q 2. 授業に熱心に取り組みましたか。
5: 全くそう思う 4: そう思う 3: ふつう 2: そう思わない
1: 全くそう思わない
- Q 3. この授業の予習・復習にあてた時間は、1週間に何時間くらいでしたか。
5: 5時間以上 4: 約4時間 3: 約3時間 2: 約2時間
1: 1時間未満
- Q 4. どのような理由でこの授業を履修しましたか。(複数回答可)
5: シラバスを読んで興味を持った 4: 資格の取得
3: 周りの人に勧められた 2: 必修科目又は選択必修科目
1: その他
- Q 5. 授業の開始時刻・終了時刻は守られていましたか。
2: はい 1: いいえ
- Q 6. 休講は少なく通常通り、授業は実施されましたか。
2: はい 1: いいえ
- Q 7. この授業の進み方はあなたにとって適切でしたか。
5: 早すぎる 4: やや早い 3: ちょうどよい
2: やや遅い 1: 遅すぎる

- Q 8. 教科書・資料・教材・器具・用具等は効果的に使われていましたか。
5: 全くそう思う 4: そう思う 3: どちらともいえない
2: そう思わない 1: 全くそう思わない
- Q9. 担当教員の授業への取り組みには熱意が感じられましたか。
5: 非常に感じた 4: 感じた 3: どちらともいえない
2: あまり感じなかった 1: 全く感じなかった
- Q10. 教え方はわかりやすかったですか。
5: 非常にわかりやすい 4: ややわかりやすい 3: ふつう
2: ややわかりにくい 1: 非常にわかりにくい
- Q11. この科目の授業内容をどのくらい理解できましたか。
5: 非常に理解できた 4: やや理解できた 3: ふつう
2: あまり理解できなかった 1: 全く理解できなかった
- Q12: この授業で受けた知的刺激に対する満足度はどうでしたか。
5: 非常に満足 4: 満足 3: どちらともいえない
2: 不満 1: 非常に不満
- Q13. ～Q15. 担当教員による個別質問
- ◇自由記述
- Q16. この授業の良かった点を具体的に記入してください。
- Q17. この授業の改善してほしい点を具体的に記入してください。
- Q18. 担当教員による個別質問

【無記名式と記名式の併用、学年別平均値】

2010年度より、授業改善に対する学生の誠実、真剣な意見・要望を集約できるようにするため、これまでの無記名式から、学生が記名式か無記名式かを選択できるように変更した。記名の有無の割合は、図1のとおりである。記名の有無別の平均値は表1のとおりである。また、学年別の平均値は、表2のとおりである。

図1 記名の有無の割合

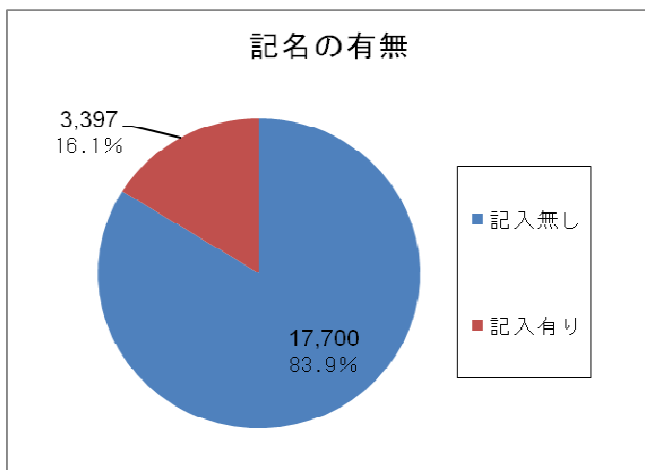


表1 記名の有無別の平均値

	記名無し	記名有り
Q1 平均値	4.7	4.8
Q2 平均値	4.0	4.2
Q3 平均値	1.6	1.5
Q4 平均値	3.2	3.1
Q5「はい」回答率	94.6	96.0
Q5「いいえ」回答率	5.4	4.0
Q6「はい」回答率	97.1	97.3
Q6「いいえ」回答率	2.9	2.7
Q7 平均値	3.3	3.2
Q8 平均値	3.8	3.9
Q9 平均値	4.0	4.3
Q10 平均値	3.8	4.0
Q11 平均値	3.6	3.9
Q12 平均値	3.8	4.0
有効回答数	17,700	3,397

表2 学年別の平均値

	1年	2年	3年	4年	その他
Q1 平均値	4.8	4.8	4.7	4.5	4.8
Q2 平均値	4.2	3.9	3.8	3.9	4.0
Q3 平均値	1.5	1.6	1.5	1.6	1.7
Q4 平均値	2.7	3.5	3.5	3.8	3.6
Q5「はい」回答率	95.0	95.4	93.7	94.8	92.8
Q5「いいえ」回答率	5.0	4.6	6.3	5.2	7.2
Q6「はい」回答率	97.3	97.3	96.6	97.2	92.8
Q6「いいえ」回答率	2.7	2.7	3.4	2.8	7.2
Q7 平均値	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2
Q8 平均値	3.8	3.8	3.8	3.8	4.0
Q9 平均値	4.1	4.0	4.0	4.1	4.2
Q10 平均値	3.9	3.8	3.7	3.8	3.8
Q11 平均値	3.8	3.6	3.6	3.8	3.7
Q12 平均値	3.8	3.8	3.8	3.9	3.8
有効回答数	8,069	6,431	3,390	2,271	70

【入試形態との関連】

2010年度より、入試形態と学生の授業への取り組み（出席状況、予習・復習時間など）との関連を把握するために入学試験タイプのマーク欄を追加した。なお、回答は任意とした。（表3 入試形態別の項目平均値）

表3 入試形態別の項目別平均値

	一般入試	大学入試センター 試験利用入試	一般推薦入試	スポーツ推薦入試	指定校入試	附属校推薦入試	留学生特別入試	帰国生特別入試	編入学試験	その他	回答しない
Q1 平均値	4.8	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.9	4.5	4.8	4.9	4.8
Q2 平均値	4.0	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	4.3	4.2	4.0	4.2	3.9
Q3 平均値	1.5	1.4	1.5	1.8	1.5	1.6	2.1	2.2	1.6	1.5	1.7
Q4 平均値	3.2	3.0	3.4	3.2	3.0	3.2	3.6	3.0	3.6	3.5	3.3
Q5「はい」 回答率	95.3	94.0	95.8	95.4	96.4	94.8	96.6	92.1	92.2	97.8	93.9
Q5「いいえ」 回答率	4.7	6.0	4.2	4.6	3.6	5.2	3.4	7.9	7.8	2.2	6.1
Q6「はい」 回答率	97.2	97.0	97.6	98.2	98.2	97.3	98.5	94.7	97.0	95.5	96.2
Q6「いいえ」 回答率	2.8	3.0	2.4	1.8	1.8	2.7	1.5	5.3	3.0	4.5	3.8
Q7 平均値	3.2	3.2	3.3	3.3	3.3	3.4	3.1	3.5	3.4	3.2	3.3
Q8 平均値	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9	3.8	4.1	3.7	3.8	4.1	3.7
Q9 平均値	4.1	4.1	4.1	4.1	4.2	4.2	4.4	4.2	4.3	4.4	4.0
Q10 平均値	3.8	3.9	3.9	3.9	3.8	3.9	4.2	4.0	3.9	4.1	3.7
Q11 平均値	3.7	3.7	3.8	3.7	3.6	3.7	4.2	4.0	3.8	3.9	3.5
Q12 平均値	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9	4.1	3.9	3.9	3.9	3.6
有効回答率 (%)	55.0	8.0	11.0	3.1	5.1	8.0	1.9	0.6	0.7	0.7	5.5

表4 学科・専攻別の項目別平均値

(学部) (専攻) (学科)	(仏教) (禅)	(仏教) (仏教)	(文) (国文)	(文) (英米文)	(文) (地理) (地域文化研究)	(文) (地理) (地域環境研究)	(文) (歴史) (日本史学)	(文) (歴史) (外国史学)	(文) (歴史) (考古学)
Q1 平均値	4.7	4.8	4.8	4.8	4.8	4.9	4.9	4.8	4.8
Q2 平均値	4.2	4.0	3.9	4.0	4.2	4.0	3.9	3.9	3.8
Q3 平均値	1.6	1.5	1.3	1.3	1.7	1.5	1.3	1.3	1.3
Q4 平均値	3.3	3.5	3.7	3.7	3.4	3.2	3.7	3.6	3.7
Q5「はい」回答率	98.5	96.5	96.8	96.4	97.1	95.8	96.7	96.0	96.0
Q5「いいえ」回答率	1.5	3.5	3.2	3.6	2.9	4.2	3.3	4.0	4.0
Q6「はい」回答率	99.0	94.2	98.7	98.5	97.3	97.3	98.1	98.0	98.0
Q6「いいえ」回答率	1.0	5.8	1.3	1.5	2.7	2.7	1.9	2.0	2.0
Q7 平均値	3.2	3.1	3.2	3.2	3.2	3.3	3.1	3.2	3.1
Q8 平均値	4.1	4.0	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.8
Q9 平均値	4.3	4.3	4.1	4.3	4.2	4.0	4.2	4.1	4.1
Q10 平均値	4.1	4.0	3.7	4.0	4.0	3.7	3.8	3.8	3.7
Q11 平均値	4.0	3.9	3.7	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	3.7
Q12 平均値	4.1	4.0	3.8	3.9	3.9	3.7	3.8	3.8	3.7
有効回答数	201	313	695	417	341	263	486	301	200

(学部) (専攻) (学科)	(文) (社会) (社会学)	(文) (社会) (社会福祉学)	(文) (心理)	(経済) (経済A)	(経済) (経済B)	(経済) (商)	(現代応用経済) (経済)
Q1 平均値	4.8	4.8	4.8	4.7	4.5	4.7	4.6
Q2 平均値	3.8	4.0	3.9	4.0	4.0	4.1	3.9
Q3 平均値	1.3	1.5	1.1	1.4	1.5	1.5	1.7
Q4 平均値	3.5	3.6	3.6	3.5	4.0	3.6	3.2
Q5「はい」回答率	98.0	96.2	93.0	95.1	100.0	94.0	96.1
Q5「いいえ」回答率	2.0	3.8	7.0	4.9	0.0	6.0	3.9
Q6「はい」回答率	97.8	94.8	99.7	96.7	95.5	97.4	97.1
Q7 平均値	2.2	5.2	0.3	3.3	4.5	2.6	2.9
Q8 平均値	3.2	3.2	3.3	3.2	3.0	3.3	3.3
Q9 平均値	3.8	3.7	3.8	3.8	3.5	3.8	3.6
Q10 平均値	4.2	4.0	4.3	4.1	4.0	4.1	3.9
Q11 平均値	3.9	3.8	4.0	3.9	3.5	3.8	3.7
Q12 平均値	3.6	3.7	3.8	3.8	3.6	3.8	3.5
有効回答数	603	924	301	2,147	24	1,717	1,921

(学部)(学科) (専攻)	(法)(法律A)	(法)(法律B)	(法)(政治)	(経営) (経営A)	(経営) (経営B)	(市場戦略) (経営)	(診療放射線技術科) (医療健康科)	(グローバル・メディア) (グローバル・メディア・スタディーズ)
Q1 平均値	4.8	4.6	4.7	4.7	4.9	4.8	4.8	4.7
Q2 平均値	4.0	3.7	3.9	4.1	4.2	4.2	4.0	4.1
Q3 平均値	1.5	1.4	1.4	1.4	1.9	1.6	1.5	1.7
Q4 平均値	3.2	2.9	3.9	3.5	4.0	3.6	2.2	2.8
Q5「はい」回答率	94.4	95.8	96.6	96.2	100.0	94.8	92.6	93.1
Q5「いいえ」回答率	5.6	4.2	3.4	3.8	0.0	5.2	7.4	6.9
Q6「はい」回答率	98.4	98.1	98.9	98.6	100.0	98.1	95.9	96.5
Q6「いいえ」回答率	1.6	1.9	1.1	1.4	0.0	1.9	4.1	3.5
Q7 平均値	3.3	3.2	3.3	3.1	3.0	3.1	3.4	3.3
Q8 平均値	3.8	3.7	3.9	4.0	4.1	4.0	3.6	3.7
Q9 平均値	4.0	3.9	4.3	4.3	4.3	4.2	3.9	4.0
Q10 平均値	3.7	3.5	3.9	4.2	4.2	4.1	3.6	3.7
Q11 平均値	3.7	3.5	3.7	4.0	4.1	4.0	3.4	3.6
Q12 平均値	3.7	3.6	3.9	4.0	4.1	4.0	3.6	3.8
有効回答数	767	215	703	723	15	367	1,117	5,712

集計結果について

今回の「学生による授業アンケート」の集計結果は、東日本大震災の影響から授業開始が1ヵ月遅れた影響もあって、昨年同時期のアンケートの集計結果(『FD NEWSLETTER』第24号に掲載)と比較して、以下のような特徴が見られた。

- ・学生が時間どおりに出席した割合(Q1)がかなり向上した。
- ・学生の授業への熱心な取り組み(Q2)も向上した。
- ・海外で高校生活を送っていたと思われる学生(留学生特別入試あるいは帰国生特別入試を経て入学した学生)の授業時間外の勉強時間(Q3)が増加した。

昨年から試みている記名回答を選択した割合は16.1%で、昨年の17.6%から若干低下した。記名の有無別の平均値(表1)と学年別の平均値(表2)からはとくに特徴と言えるものは見出せなかった。

授業評価の中心的項目と考えられるQ8からQ12までの集計結果については、入試形態別の平均値(表3)からは留学生特別入試で入学した学生が、また学科・専攻別の平均値(表4)からは仏教学部および経営学部の平均値が高かったことが示された。

連載企画：よりよい教育のために

座談会「学生から見た授業アンケート」

参加者：

井上翔一郎（経営学部経営学科4年）

谷岡理絵（文学部英米文学科3年）

中岡晃也（GMS学部GM学科4年）

鍋谷美華（GMS学部GM学科4年）

猿山義広（経営学部教授、駒澤大学FD推進委員会委員）



猿山「本日は『学生から見た授業アンケート』というテーマで、授業アンケートの意義と大学における授業のあり方について、学生の皆さんと意見交換したいと考えています。本年度は7月初旬に前期科目を対象とした『学生による授業アンケート』を実施しましたが、まず実際にアンケートに回答してもらった感想から伺います。」

1. 授業アンケートへの感想

鍋谷「私は3科目回答しましたが、今年は裏側の担当教員による個別質問に『大学にもの申してもいいよ』としていた先生がひとりいらっしゃったので、そこには書きました。」

猿山「どういったことを書きましたか？」

鍋谷「図書館の開館時間を伸ばしてほしいといったことを書きました。」

猿山「表側のアンケートについてはいかがでしたか？」

井上「1回ごとの授業について思うところがあっても、こういうアンケートって結局トータルで答えるしかないもので、どうしても漠然と、例えば、3とかでいいんじゃないの、って思って答えることが多いですね。」

中岡「それと、先生方の中には『今年もアンケートの時期になりましたので配ります』みたいな感じで配る人もいら

っしゃって、そういったあまり積極的ではない印象を受けたときは、こちらとしても回答するモチベーションが上がらないことがありますね。」

谷岡「たしかに、『毎年やっていることだから配ります』って言いながら配る先生いらっしゃいますね。」

猿山「まずいな。自分もそう言いながら配っているぞ。」

2. 授業アンケートの方法について

鍋谷「ところで、あの授業アンケートの結果はどこまで反映されているのでしょうか？また、どのような意図でやっているのですか？」

中岡「それと、個々の授業についてのアンケート結果って、わからないですよ。」

井上「大学HPに学科別の平均が示されるだけです。」

中岡「個々の授業についてのアンケート結果がわかれば、授業を選ぶときの参考にもなると思うのですが。」

猿山「満足度の高い授業ベストテンみたいなものを発表したら盛り上がると思うけど、あまり盛り上がりすぎてまずいんですよ。自分なんかはけっこう落ち込むタイプだし。」

中岡「単純なアンケートではなく、こういった座談会形式で評価するという方法も有効だと思いますよ。」

猿山「たしかにそうですね。単純なアンケートの集計よりもグループ・インタビューのほうが役に立つ意見が聞けるかもしれませんね。」

谷岡「どういった学生の意見を聞くかも重要なんじゃないですか？例えば、真面目に出席している学生の意見がきちんと反映されるようにするとか。」

鍋谷「アンケート結果って、そのまま鵜呑みにできないところもあります。本当に自分の意思で書いているのか、書かされているとしたら、面倒くさいから全部4でいいや、って思って答えている人もいるんじゃないですか？」

井上「オレ、それだ。」

猿山「個々の授業に優劣をつけるだけなら、いまのやり方でもいいと思いますよ。絶対評価にはなりませんが、満足度の平均値が3の授業よりも4の授業のほうが相対的に満足できる授業だということは言えるでしょう。」

中岡「でも、その優劣についてオープンになっていませんよね。また、改善を目標にするのなら、もっと質的調査を行う必要がありますよ。」

3. 満足度の高い授業とは

猿山「教員としては、満足度を高めるためにどういった工夫が必要かということを知りたいけど、いまのアンケートだとその辺のところはわからないという問題点はあります。」

中岡「実践的な授業は満足度が高いですよ。体育みたいなものだから。」

猿山「GMSには実践型の授業が多い印象がありますけど。」

井上「どういった授業ですか？」

中岡「ゼミ以外の普通の授業でも、グループに分かれてディスカッションしたり、自分たちで企画を立てて発表したりしていますね。」

鍋谷「能動的ですね。」

猿山「うち（経営学部）はそういう授業少ないよね？」

井上「少ないですね。」

猿山「英米文学科はいかがですか？少人数教育がきちんと行われているという印象があります。」

谷岡「いや、実際にはそれほど少人数教育でもないです。評価の厳しい先生の授業は自然と少人数教育になって、そういう授業は充実していますが、比較的単位が取りやすい大教場での授業もありますよ。」

中岡「逆に教員の側から見て、授業において学生に求めるものって何かありますか？例えば、猿山先生から見て。」

猿山「私から見て、ですか？ん～、ないんだよねえ～。目の前に学生がいてくれるだけで満足しちゃいますね。元気であればそれでいい、みたいな感じかなあ～。」

鍋谷「それじゃあ、たんなるお父さんじゃないですか（笑）。」

4. 学生と教員の意識のギャップ

猿山「学生にとってよりよい授業ってどういう授業なのかは、なかなか難しいテーマですね。」

井上「一方的に話をされても楽しい授業はあるし、それは聴く側のアンテナの問題だと思います。でも、90分というのは長時間だから、メリハリをつけてほしいですね。」

谷岡「中休憩入れてくれる授業もありますよ。」

鍋谷「あるよね。」

中岡「人間の集中力って、1時間くらいしか続かないらしいし。」

猿山「教員の側から言わせてもらおうと、大学の授業って、あ

りえない話なんですよ。1回90分で年間30回近く話すことになってますが、それだけ話していつも面白くなきゃいけないなんて、どんなに優れた芸人でも無理ですよ。」

中岡「話に困ったら身の上話する、っていうのはどうですか？」

猿山「オレの身の上話なんか聞いたって、面白くないって。」

鍋谷「中には話すことが苦手な先生もいると思うんですよ。でも、たとえ話すことが苦手でも、資料がうまくまとまっていて使い方がうまければ全然問題ありません。」

中岡「授業方法について研究して、その成果を先生方の間で共有するようにしたらもっとよくなるんじゃないですか？」

猿山「たしかに、そういうことはもっとやらないといけない。ただ、教員の側から言うと、授業方法よりも授業内容でよりよいもの、より高度なものを目指したい、っていう気持ちがどうしても強く働きますね。他大学にも勝ちたいし。」

中岡「えっ、そこですか？他大学よりもわかりやすく教えて満足度を高めるほうが重要なんじゃないですか？」

猿山「そうなんだけど、個人的には他大学のシラバスと比較して、自分の授業内容のほうがレベルが高いと『勝ってるな』って思ってしまうところはある。」

鍋谷「先生のその考え方と授業を受ける学生の姿勢にギャップがあるから、満足度が上がらないんじゃないですか？それに授業のレベルって、学生にはよくわからないですよ。」

猿山「それが原因だったのかっ！そう言われて思い出したけど、過去のアンケートにはレベル設定に関する設問があって、その平均値がかなり悪くて、『まったく学生はわかってないな』って思っていたけど、悪いのは自分だったのか。」

谷岡「英米文の場合、個々の先生方が研究していることをそのまま授業で話すというスタイルですから、授業内容のレベルということはあまり問題になりませんね。」

猿山「大学の先生の多くは、高校までの先生方とは違って、教育者になるための専門的なトレーニングを受けていません。自分自身も論文読んで、論文書いてだけでこの仕事に就いたんで、『教える』ということがどういうことかわからないままやっているところはあります。」

鍋谷「そんなこと言われちゃうと、学生として、先生方にど

こまで要求していいかわからなくなっちゃいますよ。」

5. 30年前の面白い授業

中岡「ちなみに、猿山先生はどうやって教え方を学んでいったんですか？」

猿山「最初のうちは本当に何をどう喋ったらいいのかわからなくて、とりあえず師匠の真似をしていましたけど、ちょっともうまくいきませんでした。でも、その原因は、師匠の教え方が悪かったからではなく、自分と師匠のキャラクターや得意分野が違っていただけだったと思います。師匠は真面目人間でしたから。そこで、自分のキャラクターや得意分野を生かせるように少しずつ工夫を加えていって、現在の教え方になりました。実際にうまく教えることができているかどうかはわからないけど。」

中岡「先生が学生のときに面白かったと思った授業は、どういう授業でしたか？」

猿山「自分の学生時代だから30年前の話になりますが、一番面白かったのは『財務管理論』でした。他の授業と比べて内容は難しかったけど、基本的な考え方も含めて、わかりやすく教えてもらいました。それと、欧米における新しい考え方を扱っていたことも魅力的でした。インターネットなんてない時代だったから、欧米における最新の考え方を学べることは、それだけで価値があったと思います。」

6. 教材・器具・施設に望むもの

猿山「ところで、教材・器具・施設といった教育環境に関する意見は何かありませんか？」

中岡「深沢校舎と246会館をもっと使わせてもらいたいです。ゼミなどで集まって自主的に勉強したいという学生がいても、すぐに利用できるようになっていないと感じます。」

鍋谷「それは賛成ですね。私は大学って、もっと自由な場所だと思っていたんですよ。でも、実際は厳しい。」

谷岡「深沢はもっと開放してほしいですね。いつでもそこに集まれるように。」

猿山「こんなこと教員が言っちゃいけないかもしれないけど、授業でできることって実際には高が知れていて、授業時間以外でどれだけ勉強してもらえるかで教育の効果っ

て決まってくるところがあって、授業時間以外でどれだけ学生が勉強できる環境があるかってことは、重要な問題です。」

谷岡「環境は大事ですよ。」

鍋谷「環境に関して学生の意見は聞かないんですか？」

猿山「Q8で『教科書・資料・教材・器具・用具等は効果的に使われていましたか。』って訊いていますが、もっと広く環境について意見を聞く必要がありそうですね。」

鍋谷「ぜひお願いします。」

中岡「まあ、学生の使い方も荒いからなあ。」

井上「たしかに、そうだね。」

鍋谷「私は、みんながどう考えているのか、数字ではなく文字化された情報として知りたいですね。みんな何を思っていて、何を思っているから授業に対してどうなのか、っていうことを明らかにしてほしいです。」

谷岡「同感です。」

7. 結びに代えて

猿山「いや〜、たぶんね、学生はみんな勉強が好きなんだよ。

いつもそうだってことじゃないけど、学生がみんな、こちらが切ない気持ちになるくらい勉強好きに見えるときがあって、それは、たまたまなんだろうけど、学生の勉強スイッチが一斉に入っちゃったときで、そういう状態になった学生を教壇から見ると、『何で君たちはそんなに勉強好きなんだよっ！』って思いますね。それにしても、学生中心の座談会なのに、さっきからひとりで喋ってるね、オレ（笑）。でも、とにかく、今回の座談会を通じて自分の授業には、レベルが高ければそれでいい、っていうちょっと独りよがりの部分があったことがわかって、よかったです。」

中岡「いやいや、レベルは高くてもいいですよ。」

井上「伝わりやすく、ってことです。」

鍋谷「学生のことも考えて。」

猿山「今日は普通の授業では会えない他学部の学生ともこうして意見交換をしています。こういうのもやってみたら面白そうですね。公開授業に教職員だけでなく、正規にはその授業を履修できない他学部・他学科の学生に来てもらって、終わってから授業についての感想を聞けたりしたら、とても勉強になるんじゃないか、って思いました。本日はどうもありがとうございました。」

平成23年度FD推進委員会の今後の活動予定

- 平成23年度第4回FD推進委員会小委員会

平成23年9月28日(水)

*FD活動についてご意見がありましたら、各学部等のFD推進委員会小委員会委員まで申し出てください。

書評



京都大学高等教育研究開発推進センター(編)、松下佳代(編集代表)『大学教育のネットワークを創る FDの明日へ』(東信堂、2011年)

本書は「相互研修型FD」をテーマに、日米におけるFDの最新事例に基づいて、FD活動のあり方について述べている。

本書のキーワードである「相互研修型FD」とは、1994年の京都大学高等教育教授システム開発センター(高等教育研究開発推進センターの前身)設立時からの理念であり、専門家から一方的かつ啓蒙的に教育方法と教育組織の標準的モデルを伝えてもらい、それを習得するのではなく、それぞれ異なる背景を持つ教員・組織が相互に影響し協働しながら、よりよい教育集団としての形成を目指す考え方のことである。

本書によれば、「相互研修型FD」のメリットは、個々の教員・組織に合ったFDが自発的に形成されること、そしてその過程において当該組織だけでなく受講者である学生、さらには他大学や地域社会まで巻き込んだオープンな議論が展開できることにある。短期的な授業改善について大きな期待はできないかもしれないが、長期的には有効な方法であろう。

本書では、「相互研修型FD」を採用するにあたっての注意点として、この考え方がPDCA(Plan-Do-Check-Action)サイクルに馴染みにくいものであることが指摘されているが、それは、「相互研修型FD」が計画された目標に向けての改善ではなく、教育組織全体の創造的改善を志向しているからである。標準的な教育であるべきか、より創造的な教育であるべきかは、現代の大学教育が直面する重要課題と言えよう。

(猿山義広)

編集後記

本号は前期の「学生による授業アンケート」特集号として企画・編集を行った。巻頭言は小野教務部長に、平成26年度実施に向けて現在取り組まれている本学のカリキュラム改革と教育の質についてご執筆いただいた。ちなみに、小野教務部長は駒澤大学FD推進委員会小委員会の初代委員長である。多忙な中でのご執筆であり、深く感謝したい。

授業アンケートの集計結果については例年どおりだが、今回は連載企画として、授業アンケートの実施後、回答者である学生に協力してもらって、「学生から見た授業アンケート」というテーマで座談会を行い、そこでのやりとりを掲載してみた。協力してもらった学生に感謝する次第である。

座談会の中で話題になった教員側の「よりレベルの高い授業を実施したい」という意識と、学生側の「よりわかりやすい授業をしてもらいたい」というギャップはFDの課題のひとつであるように思われる。理想としては、教員がよりレベルの高い授業をよりわかりやすく展開する一方で、学生は自分にとってレベルが高すぎる授業であっても、授業時間外で努力することによって理解を深めていくことが望まれるが、そうした理想が少しでも現実のものとなるために、いかなるFD活動を実践すべきか、そのうえでどのように教員・学生双方をサポートしていくかを考えていく必要があるだろう。

なお、東日本大震災後の不安定な状況で開講された前期の授業科目が、アンケートの集計結果を見る限り、全体的に高評価だったことは、予想外であり、興味深いことだった。

(佐藤多美夫・猿山義広)

【タイトル横の写真は、1号館ピロティ】

FD NEWSLETTER Sep. 2011 第28号

発行日：2011年9月30日

発行者：駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

TEL 03-3418-9444 Fax 03-3418-9114

(事務局：教務部)